万博×環境　未来を描こうプロジェクト
万博みらい研究会コラボイベント　第１回キックオフプレゼン会
概要報告

［主　催］万博みらい研究会（事務局：株式会社三菱総合研究所）
［日　時］2020 年 12 月 22 日（火）16 時～18 時
［会　場］Microsoft　Teams によりオンライン開催
［参加者］〇若者メンバー発表者
橋本碧、森成諒、市野梨央、多田裕亮、峯有紀
〇主催等関係団体
三菱総合研究所　未来共創本部　須崎彩斗　本部長
大阪府環境農林水産部　環境政策監　金森佳津
〇参加者数：41 名（うち、企業団体数 32 社）

［概　要］　大阪府及び豊かな環境づくり大阪府民会議では、2019 年 9 月に「万博×環境未来を描こうプロジェクト」を立ち上げ、2025 年大阪・関西万博に向け、多くの若者（高校生・大学生等）から、実現して欲しい環境・まちづくり等の様々なアイデアについて、ワークショップ等を開催し、2020 年度も引き続き検討を進めてきました。

　当プロジェクトにおいて、万博みらい研究会（※）とコラボし、未来社会の担い手である若者のアイデアを万博で実現・実装し、レガシーとして残すことを目標として、会員企業様から若者をさまざまなかたちで応援いただくイベントを開催します。その第１回として、企業や関係団体等との意見交換や交流を目的に、チームメンバーのアイデアプレゼンを中心としたキックオフプレゼン会をオンライン開催しました。

※万博みらい研究会：2025 年開催の国際博覧会（大阪・関西万博）事業を通じて、未来社会像を積極的に発信し、地域、企業、ベンチャー、研究機関などとの共創による未来社会を提案することを目的として三菱総合研究所プラチナ社会研究会分科会の一つとして設立。代表提案者：株式会社三菱総合研究所 万博推進室。

［次　第］・開会挨拶
・大阪府挨拶
・趣旨説明
・若者メンバーからのアイデアプレゼン及び出席企業からのコメント・質疑応答
・閉会挨拶
・交流会

１．アイデアプレゼン

【A 班】つくる責任つかう責任
発表者：橋本碧

【B 班】SDGs GAME・SDGs Point
発表者：森成諒、市野梨央

【C 班】大阪防災プラットフォーム
発表者：多田裕亮、峯有紀

各班の発表資料は大阪府 HP：万博×環境　未来を描こうプロジェクト「第１回キックオフプレゼン会」に掲載。

２．アイデアに対するコメント

各班のアイデア発表について、次のとおり、三菱総合研究所コンサルタントから講評をいただきました。

【A 班】つくる責任つかう責任

ポリシー・コンサルティング部門　サステナビリティ本部　環境イノベーショングループ　　古木二郎氏

- 面白い案で、かつ現実性も考えられていると思った。ペットボトルに飲み物を入れると考えた際、ジュースではなく「水・お茶から」と考えられた点も現実的。
- 引き続き検討してほしいことが２つ。１つ目は、バイオマスとの関係や、水・お茶を供給できる仕組みにおける CO_2 排出の観点からの言及。２つ目は、コンビニのコーヒーのカスについて、資源循環が問題となったように、お茶の葉をどうするか？も課題として考え、何か案があると現実的。
- 使い捨て容器については、万博で 150 円で借りて 100 円で返すことを考えた際、「150 円なら記念に持って返ろう」という人が多いのではないか、と思った。ペットボトルの機能として、「透明で見える」ことに対するニーズが大きい。それを技術で解決できることがないか検討してみてほしい。トライしてみることが重要。

ポリシー・コンサルティング部門　サステナビリティ本部　環境イノベーショングループ　　森部昌一氏

- 今後の検討という意味でお話しすると、万博前・中・後で考えることは継続性をもつようにしてほしい。万博は半年だけで終わるので、一過性ではなく、若者がレガシーとして残していくことが重要な観点。
- あとは、検討の切り口として、万博は海外の方も来られるので、各国の文化や、飲み物を飲む時の慣習、飲むもの、衛生面への考え方、価値観等も変わってくると思う。そういった多様性についても考えると良いのではないか。
- その他の検討の切り口としては３つの観点があると思う。①デポジット等の制度・仕組み、②万博なので見本市としての新技術、③経済的な価値・インセンティブ。
- 引き続き応援しているので、頑張ってほしい。

【B 班】SDGs GAME・SDGs Point

ビジネス・コンサルティング部門　イノベーション・サービス開発本部　地域 DX 事業部長　堀健一氏

- ぜひゲームの内容を深めていっていただきたい。チーム戦という着眼点もよい。ゲームを設計するうえで、どんな「気づき」を与えることを目指すのか、を具体化することが重要。「気づき」の例として、例えば、行動の相互作用があること、合意形成が難しいこと、政策立案は非常に難しいこと、重要そうだが実はインパクトが小さいこともあることなど。
- SDGs ポイントについては、万博みらい研でも同じ趣旨で「万博コイン」を提案した。関連して東京ユアコイン等の実証実験も行っている。ぜひ実現にむけて具体化してほしい。例えば、参加者、加盟店にどう協力してもらうか、認証の指標など。どのような企業を巻き込むのか、具体名を挙げて検討してみるのもよい。また、加盟店からお金をとるだけでなく、ESG、SDGs に関心のある企業から、資金を集めるといったアイディアもあるのではないか。幅広に考えてみてはどうか。

ポリシー・コンサルティング部門　サステナビリティ本部　環境イノベーショングループ　　森部昌一氏

- ゲーム・ポイントの両方に共通するのは、環境はSDGsの一部分なので、他のSDGsに貢献する行動にも目を向けるとよい。ゲームやポイントのメリットについて、もう一度具体的に検討するとよい。
- ゲームとポイントを連動して考えるとよい。ゲームは、万博開催前・開催後も参加できるような発展的な仕掛けがあるとよいのでは。
- ポイントは、プラットフォームづくりが重要。参加者のうち、一翼を担ってくれる企業もあると思うので、参加を訴えかけていただくとよいのでは。

【C班】大阪防災プラットフォーム
ポリシー・コンサルティング部門　スマート・リージョン本部　国土・地域政策グループ　グループリーダー　田村　隆彦氏

- 具体的で完成度の高いプレゼンだった。関係者のインセンティブや具体的な事業例があり、今後の展開をイメージしやすい。
- より実効性の高いものにしていくために、３点アドバイスしたい。

①多様な主体を巻き込んでいくことがこのアイデアの魅力であるので、参加のイメージが持ちやすくなるように、サービス提供イメージ、提供シーンをさらに具体化し、企業の意見を聞きながらブラッシュアップしていくとよい。
②各参加主体が積極的に動けるよう、誰がどんな役割をするのか、どんな課題を持っているのかを明らかにし、それぞれの課題(地域団体：担い手不足、研究機関：フィールドがない等)をつないでいくような取り組みが考えられるとよい。行政から委託をうける想定だが、民間企業やボランティア等へのクラウドファンディング等、運営における活動リソースの多様化についても検討するとよい。
③継続的な運用をするために、市民・企業が継続的に関心をもっていただけるような仕組みが必要。企業の商品開発に市民が参加していくなど、企業・市民双方にメリットが感じられるような体験、市民が防災意識を高めるようなプログラム(AR・VR、ゲーム性のあるものなど)などの具体イメージがあるとよい。平時も有効な機能が提供できれば、より持続的な取り組みにしていけると思う。平時を考えると、環境や国際協力等の視点もポイントとなる。

ポリシー・コンサルティング部門　サステナビリティ本部　分散型エネルギーソリューショングループ　浅岡　裕氏

- なんとかしたい！という気持ちが伝わってくる良いプレゼンだった。防災は、熱心な人とそうでない人の温度差が課題で、いかに普通の府民を巻き込んでいくのかが重要。そのためには、平時のメリット・インセンティブがポイントになるだろう。災害時の生存率・避難所の暮らしには、インフラ(電気・ガス・水道・通信)の有無が大きく影響してくるので、インフラ企業も参画いただけるとさらに良いプラットフォームになるのでは。

３．総　評

三菱総合研究所　西日本営業本部 兼 万博推進室　高橋本部長（兼室長）から総評をいただきました。

- A班：「つくる責任、つかう責任」ということで「万博規格」という発想は面白いと思う。万博のレガシーとして、また万博の思い出と一緒に行動変容が起こるようなことも期待できる。
- B班：SDGsゲーム、SDGsポイントとも、SDGsを身近なものと捉え、行動変容を促す試み、仕組みとして素晴らしいアイデア。ゲーム等、子どもの教育現場で使えると良いと思う。
- C 班：防災に関する大きな課題提起だった。気候変動・環境変化が大きい中、有意義なテーマ。防災パビリオンがもし実現できたら、レガシーにもなり、防災意識を高めるものになると思う。
- 全体：全体を通して ICT 活用で尖がった提案でなかったことは意外だったが、その分リアリテ

ィはあった。

- 基本方針の閣議決定や、博覧会協会・大商主催の夢洲における実証実験の提案公募に向けた案内等、これから様々に動いていくだろう。万博は、「未来社会のデザイン」を目指すもので、ぜひ若い皆さまの発想、エネルギーで盛り上げていけると良いと思う。本日はありがとうございました。

４．交流会

閉会後、グループごとにオンライン会議のトークルームに分かれ、チームメンバーと参加企業との交流会を実施し、三菱総研講評者の進行のもと、引き続き意見交換等を行いました。